



Member's Open Space

浅草の思い出 (12階と花屋敷)

●美明歯科医師会会員
雨田 実



浅草六区に関する雑文を綴らせて頂いたところ、ご年配の先生がた(大正初め頃、お生まれのかたがたら)から、12階について知りたい、とのご指摘を頂いた。私の生まれる前のことでもあり聞き伝えに頼るほかもなく、時代考証の点からも不確かなものになってしまうことであろうと思ひながら綴るので、見てきたやうなことのないやうに心して書かせて頂く。12階、正しくは凌雲閣と呼び、名曲、「荒城の月」の作曲者、滝廉太郎の従兄弟の滝大吉という日本の代表的な建築家が英国人技師ベルトンと共に、明治23年に建てた10階迄はレンガ造り、その上が木造建ての12階建ての地上50mの高さで、当時としては大変なもので通称12階と呼んだ。ラセン階段で登ることができて各階に飲食店などがあって、窓から東京中はいまでもなく関東一円を眺望出来たらしく、長い間東京名物の一つとして大空に聳えていたという。高さも高いし風が吹くと恐ろしいし、スリル満点ではあったけれど皆登って見たい気持は十二分にあったが、入場料が大人5銭と当時としては高かったし、何も入場料まで払って恐い思いをすることは無いというので、ながめている人ばかり多くて登る人が少ないため経営者は「ここまでおいで、甘酒進上」という広告を出して12階に登った人には、鮎屋のような大きな湯呑みで、上等な甘酒をサービスしたという。この一策が効を奏して、12階は事業としても成功した。その東京名物が、大正12年9月1日午前11時58分の関東大震災で、グラグラときてドーン。この一発で12階が8階から上が折れ落ちたという説と8階から上が折れて、ぶらさがったという説があるが？陸軍の赤羽連隊の工兵隊が、危険ということで爆破して取りこわしたことは事実であるという。

震災の前には、その12階の下の一帯、今の国際通りの前側に怪しげな女性を置いた怪しげな店が櫛の歯のように多数並んでいて、ところどころに柳の木が植えてあって、その下にガス灯がボンヤリと点いて中々に風流だったという。柳のかげに姿あり、姿の影に涙あり、涙のかげに女あり…

この赤線地帯も12階を片付けるとき一緒に片付けられ、永井荷風の不朽の名作？「墨東綺譚」に書かれている地帯や亀戸天神裏界限に移転させられて昭和30年代の赤線禁止令まで、ぬけられます地帯として雑草のやうに生き続けたという。私の聞いた所では浅草の12階の跡には現在もある花屋敷が出来て、浅草としては子供を交えての家族連れの健全な遊び場として特に戦前は人気があった。これは私自身が学齢前の記憶として今でも鮮明に覚えている。その頃の花屋敷は現在の花屋敷と異なっていて始めに入場料を1度払えば、食べ物以外は観るもの遊技場すべて無料であったことも人気のあったものと思う。ちゃんと花道のついた芝居小屋もあったし、チャップリンなどの古い2~3巻物を見せる映画館もあった。今見るとまことに狭い敷地内に、はなれていくつもの小屋が建っており、1つの小屋から次の小屋へは外を歩いて移動したのが、どうにも信じられない。しかも鳥や猿の檻だけでなく虎・ライオン・狒々・熊からアシカなどまで飼われていたし、花屋敷の名の起りを守って、四季それぞれの草花もきれいであった。特に秋の菊人形が、これは入口付近に美しく仕立てられていたものであった。入場料は30銭くらいだと思いが学齢前の幼児は無料だった。

小学校に入っている子供でも3年生ぐらいまでの場合は殆んど只で入れてくれたので、花屋敷には毎日のように行きたかった。花屋敷は当時の子供達にとっては一番の遊び場だったのである。

それにひきかえ、現在の花屋敷は面積は同じである上に入場は無料であるが、ひとつ、ひとつの子供乗物が全部有料だから、よけいに狭く感じられるし、こせこせした感じばかりで、家族皆で楽しむことの出来た昔の花屋敷の楽しい雰囲気は殆ど感じられないのは、なににも増して寂しいと思うのは私が年を取りすぎたせいであるのかもしれない。戦前の東京のチンチン路面電車では上手に乗れば、7銭で東京中線路のある所なら何所へでも行けたし、早朝なら往復9銭で乗れたことなどを思い出すのはやはり年のせいであろうか。